

第17期
「京都教師塾」

令和5年1月7日

塾生通信

学びの広場

January

京都教師塾通信
No.6

京都市教育委員会 教員養成支援室

先生になるということ ～学校で教室で大切にしたいこと～ 講師 藤田 路乃 専門主事



本日の全体会から私は二つの学びが印象に残った。一つ目は、授業において、対象を具体的に考えて計画するということだ。“児童生徒”と一括りにしても、そのクラスごとに色は違うと思うため、抽象的に対象を捉えて授業の準備をしてもはまらないことがある。藤田先生はそこでAという具体的なクラスの子どもの対象にして授業を準備したことによって、個人への指導が全体への指導につながった。準備を徹底的にする前に、まずは目の前の子どもや学級の現状に目を向け、対象を絞ることが大切だと私は学んだ。そして、二つ目は、アンテナとストックについてである。私は普段から、授業に使えるものはないかと無意識にアンテナを張っていることが多く、Youtubeの広告、電車の広告のひきつけ方、歌の歌詞の表現、テレビのCM、絵本の仕掛け、町のポスター、他の先生の働きかけなど、自分の興味がひかれたものや素敵だと思ったことはいつか使おうと携帯のメモにストックする癖がある。今回、その感覚が藤田先生の話すアンテナと近いものを感じ、これからもこの習慣を意識的に続けようと思った。

分散会では、個人の指導から全体の指導につなげることについて内容を深めた。そこでは、陰でほめる・しかるタイミングと、全体の場でほめる・しかるタイミングのラインが難しいことがテーマにあがった。A君のみをほめて評価するのは下手すれば周りの不満を買い、学級崩壊につながるかもしれない、そのラインを定めるためには経験も必要だと感じた。分散会での発表を聞いて、周りの特性を理解してもらい、みんながみんな一人ひとり大切だと思ってもらう働きかけが大事だと学んだ。また、アンテナも一人ひとり張り方が違うのだと初めて知った。

素晴らしい学びができましたね。大事にしてほしいことを的確に捉えて、簡潔にまとめられています。まずは、出会った子どもの特性を見極めるまでにざっと雰囲気をつかむことです。そして、配慮や支援などが必要な子どもに焦点を当てて学級経営や授業づくりをします。「焦点を当てる＝対象を絞る」ということです。しっかり意識をして手立てをもっていたならばその支援は必ず波及します。あなたの考えの通りです。ぼんやりした結果にはなりません。アンテナについても驚きました。が、それでいいのです。人によってアンテナの張り方や向け方は違います。私は「人権意識」にアンテナを向けています。それは、子どもも自分も人として気持ちよく過ごせるためには、どんな人であって欲しいかを大事にしているからです。

先生になるということ ～学校で教室で大切にしたいこと～ 講師 太田 勝 専門主事



今回の講義の冒頭に「よい〇〇は人生を変える」というテーマについて話され、私はここに“失敗”という言葉が初めに浮かびました。私のこれまでの人生が失敗ばかりだからということではなく、これまでに経験した大きな失敗の一つ一つが自分の中で転機になっていったからです。そして、失敗した直後は後悔もしました。でも、それをどう受け止め、今後どう生かすかを考えた先に“よい失敗”へと変えられると感じました。また、講義の中で挙げられた「教師は子どもにとって学びの『環境』である」ことや、「自立とは多様な依存先を持つ」ことという部分が印象的でした。これまでの自分の考えを大きく覆す内容だったことが一番の理由です。「教師とは子どもが学ぶための環境を整えたり、創り出したりする」立場にあると考えてきましたが、教師自らが行う授業や発する言葉、生徒に見せる行動から子どもたちが「学び」を得ると考えるなら、教師自身もその学びの「環境」の一員であるというより強い自覚をもって教育現場に当たっていきたいと感じました。また、「自立」という言葉に関して、「自らの力（だけ）で立つ（生きる）こと」だと考えてきましたが、「生徒には学校生活を送る中で、今後、社会で生き抜く力を身に付けて欲しい」、これこそ「自立」と考えるなら、自分自身のことをよく知り、強みや足りない部分を理解することで、必要な部分を補い（頼り）ながらやり遂げることこそが「自立」であると感じました。私自身も頼り頼られる「自立」の形を目指し、多くの生徒の拠り所（依存先）になれる教師になりたいと感じました。

「成功か失敗か」ではなく、「成功か学んだか」。これはある高等学校の探究活動の報告会であいさつをされていた校長先生がおっしゃった言葉です。レポートを読みながら、その時のお話の内容を私自身も思い返していました。レポートにあるように、失敗をどう受け止めるかという点においては、私が今回の講義で伝えたかった「想定できないことに向き合い、受け止めることができる主体性」に通じるところがあると感じています。また、教師は子どもにとって学びの環境であることを印象に残してくれており、より強い自覚を意識してくれたことや、多くの生徒の「拠り所になれる教師」になりたいという決意も示され、心強く思います。

小学校



中学校



補講

第4回特別講座

「日本語指導が必要な子どもたちの受入の実際

～人権教育を土台とした京都市の取組～

講師; 学校指導課 大菅 佐妃子 副主任指導主事



第4回は学校指導課の大菅佐妃子先生に、日本語指導が必要な子どもたちを取り巻く実態と、人権教育を土台として推し進められてきた京都市の取組についてお話いただきました。まず、冒頭は、国籍別の外国人児童生徒数や日本語指導の対象となる児童生徒数の変遷をはじめ、彼らの母語や保護者の来日理由といった各種データを示しながら、年を追うごとに多様化・散財化する状況について解説されました。次に、実際に日本語指導が必要な児童生徒を受け入れる際の具体的な流れや面談で伝える内容、宗教上の配慮などについて、実際に受け入れることを想定した事例演習も取り入れながら、わかりやすく整理していただきました。そして、子どもたちの学力を支える二つの柱として、「アイデンティティの形成」と「学習参加ができる授業」を挙げられ、疎外感や劣等感を感じさせることなく、安心感と意欲をもって日々の学習に取り組めるための5つの支援（理解支援・表現支援・記憶支援・自律支援・情意支援）について、それぞれの具体例を示しながら、説明されました。最後に、京都市が取り組んできた「一人一人の子どもを徹底的に大切にす」ための外国人教育の理念や各種取組についてお話しされ、社会の状況を踏まえながら、継続的に実践を積み重ねることの大切さを学ぶことができました。どのようなルーツをもつ児童生徒であっても、一人一人がその強みを生かして、生き生きと学ぶことができる学習環境づくりに努めていきましょう。



第5回特別講座 「障害がある子どもへの教育

～インクルーシブ教育の理念と一人一人の教育的ニーズに応じた教育支援～

講師; 総合育成支援課 伊丹 由紀 首席指導主事



第5回は、総合育成支援課の伊丹由紀先生に「障害がある子どもへの教育」についてお話いただきました。冒頭に、一人一人の「教育的ニーズ」に重点を置く特別支援教育の定義を確認し、児童生徒数の推移をまとめたデータを参照する中で、特別支援学校や通級指導等を通じた特別支援教育を必要とする児童生徒が増加傾向にあること、そして、障害や特別支援教育についての理解や認識の高まりといった、背景にあるものについても学ぶことができました。

次に、「一人一人ちがう」ということを念頭に置いた上で。自閉症や LD、ADHD、自閉スペクトラム症といった発達障害の特性について、それらに該当する子どもたちの視覚情報の捉え方を図示したり、文部科学省の各種手引を引用したりしながら、丁寧に解説されました。その中で、障害がある子どもにとって、「一人一人の子どもに応じた『教育』こそが、最大の治療薬である」という大切な理念を知ることができました。

また、講義の中では、京都市と国が推し進めてきた取組の経過についての解説もあり、自治体と国が一体となって、共生社会の形成やインクルーシブ教育システムの構築を目指してきたことがわかりました。さらに、学びに連続性をもたせるためには、一人一人の教育的ニーズに応じた多様な学びの場が保証されたり、合理的配慮がなされたりする必要があることも学びました。教育のユニバーサルデザイン化等の取組を通じて、子どもの「できる」や「わかる」を大切に教育実践を積み重ねていきましょう。

